

壹

2021·6

六月集

亀田虎童子

百までは五年ほどなる春月夜
つつましく生きながらへて野蒜摘む
俺様と言はんばかりや蟾蜍
難聴の耳垢ほじる聖五月
夏隣五つ数へる指五本

水叩く池江の拳風光る 東京 飯塚トシ子

水面雲ゆらす番の春の鴨

春の雲森に尺八吹く人も

朝日さし手に触れてみる桑の花

高低はあれど出そろう菖蒲の芽

春光や右肩落とす波郷像 東京 加倉井たけ子

草の芽の伸び放題に小名木川

花蘇枋対岸にビル林立す

撫で牛の鈴新たなり風光る

雑草の中のひとつに小判草

吉祥天のほほふつくらと春惜しむ 東京 釜田 敬司

花人となりて湖北の隠れ里

壁の絵の一隅捲れ春休み

はなならや地に敷きつめし白き星

谷根千や桜蔭降る路地巡る

午前より午後の長くて残り鴨 東京 小島 良子

雨脚のしだいに激し春一忌

きのふより少し流され蝌蚪の紐

葛飾や白木蓮の夕づきて

神経の葉小粒や紫荊

今なにをと常に吾に問ふ春一日 埼玉 関 喜久子

ねばならぬ事に動きし春一日

春暁や友生き還る夢の中

漫画読み始めば呼べるのどけしや

春嵐収まり雲の翔ぶ形

千鳥ヶ淵ボートが描く花筏 東京 菅原 朋子

桜古木団地の地面桃色に

八分咲き鷺は川面を凝視して

花屑の中にタンポポ咲き乱れ

花に酔ふドローンの桜吉野山

加賀城址登城のごとく土筆ん坊 東京 武田 未有

かはたれ星早出に匂ふ沈丁花

どんよりと指の深爪春愁

旅したや遠富士へ掃く春落葉

駅カフエに身を沈めたり春夕焼

春障子呵々大笑の気楽坊 東京 土田野里子

鑿の冴え天心像の春姿

春まだき猫の動画に癒さるる

日溜りに早春の花名を知らず

起き出でて牡丹雪みる窓辺かな

高原の陽を巻きこみて春キャベツ 千葉 中山 恵子

花万朶ひと声鳥の青空へ
息切らし休む坂道梨の花
童らも野の花捧げ花御堂
眠さうな蚯蚓に土をかけやりぬ

黒猫と過ごす喪服の春夕べ 東京 根来 隆元

亡き妻のふとん敷きたり春の宵
亡き母は近くて遠く別れ霜
春の暮れ土の香高く茶毘のあと
ものの芽に仏頂面のほぐれたり

平佐 悦子

啓蟄や鶏こ糸を使ひ分け 茨城

花見より戻りて一つ歳とりぬ
焼さざえ波のもやうの出店かな
雨のさくら風のさくらとなりにけり
のどけしやのろのろ走る耕運機

春興や初めてレディと対局す 東京

さくら散る後期高齢保険証
逃水や四つ葉マークの追ひつかず
久しぶり電車で読書春日和
自粛解け野川公園花ぐもり

ふなかわのりひと

囁む前に既にくたくた雑煮餅 東京 松下 道臣

福笑ひ目隠し外れまた笑ふ
書初の感謝の二字は選びし字
落したる茶碗の欠けら久女の忌
坐りしまま伸びをしてゐる寒釣師

啓蟄の屋根まで届く長梯子 千葉 光成 敏子

檜扇の開かれ女雛口隠す
なだらかな斜面色付く仏の座
小綬鶏の高鳴き森の行き止まり
絵馬の寺河津桜の花日影



しんがりの蟻しんがりを楽しみぬ 中村正幸

角川俳句年鑑二〇二一

ルナールの博物誌「蟻」の一節に、

「cccccccc——ああ きりがない」とある。

本当に蟻の列を見ていると、前の蟻に只管従ってみな急いでいる。蟻には蟻の社会があつて忙しそう。

掲句は何となく楽しい。しんがりの蟻が、あまり一生懸命ではなく、辺りをキョロキョロしながら、前の蟻と一寸間をあけたりして列についてゆくように見える。私達にもこれはよく判る気持で、どのような集団でも先頭グループから外れると、これは又特別な気楽さがあるもの。

ゆつくり行こう、そんな気持にさせて下さる一句である。

したたりの思ひ出したるごと落つる 正幸

「滴りのきらめき消ゆる虚空かな 富安風生」「したたりの音の夕べとなりにつけり 安住 敦」など滴りは詠まれた。

掲句は、滴りを落す山自身がふと思ひ出したように、と受け取れる。次の一滴までの穏やかな時の流れを感じる。

母語のごと山河しづかに滴りぬ 正幸

もあつた。母語とは、幼い頃母親から自然に習い覚えた言葉である。母のふところの安らかさを思う。滴りは、天地のやさしい息遣い、山河は母そのものであろうか。

崖多き水戸に育てて秋薊

今瀬一博

角川俳句年鑑二〇二一

水戸と言えば、徳川ご三家三十五万石の城下町である。千波湖の小波から始めて水戸の街を巡ったことがある。偕楽園の木々は鎮まり、弘道館は清らかな印象であった。

徳川光圀の大日本史編纂に由来する水戸学は、儒学、国学史学、神道を基としたもので、尊王敬幕の思想といわれる。

人は地霊に育てられる。水戸の地の方々からは、どこか毅然とした芯の強さを感じられる。水戸に崖が多いかどうか判らないが、掲句の崖は、かの地の大きな力に常に向き合ってこられた氏の、心の中に聳つ崖かも知れない。

棘の多い切れ込みの深い葉に、紅紫色の頭上花を掲げる薊、それも秋の薊となれば、水戸の精神に通

うようにも思う。

ふるさとの雨は痛かり山帽子

一博

山帽子の花は球状で、それを包むように四枚の白い大形の苞が花弁のように付く。庭木にもあるが、ひっそりとした山道に佇む木。故里は懐かしいが、楽しい記憶ばかりではない。人はいつか、生きていくことの痛みを覚らねばならない。雨が痛いと言まわって、その奥の重層的な思いを感じとれる。

小原流いけばな辞典に「野生のものであるから山間の情景の表現に用いる」とある。山帽子は厳しい山の木と思う。